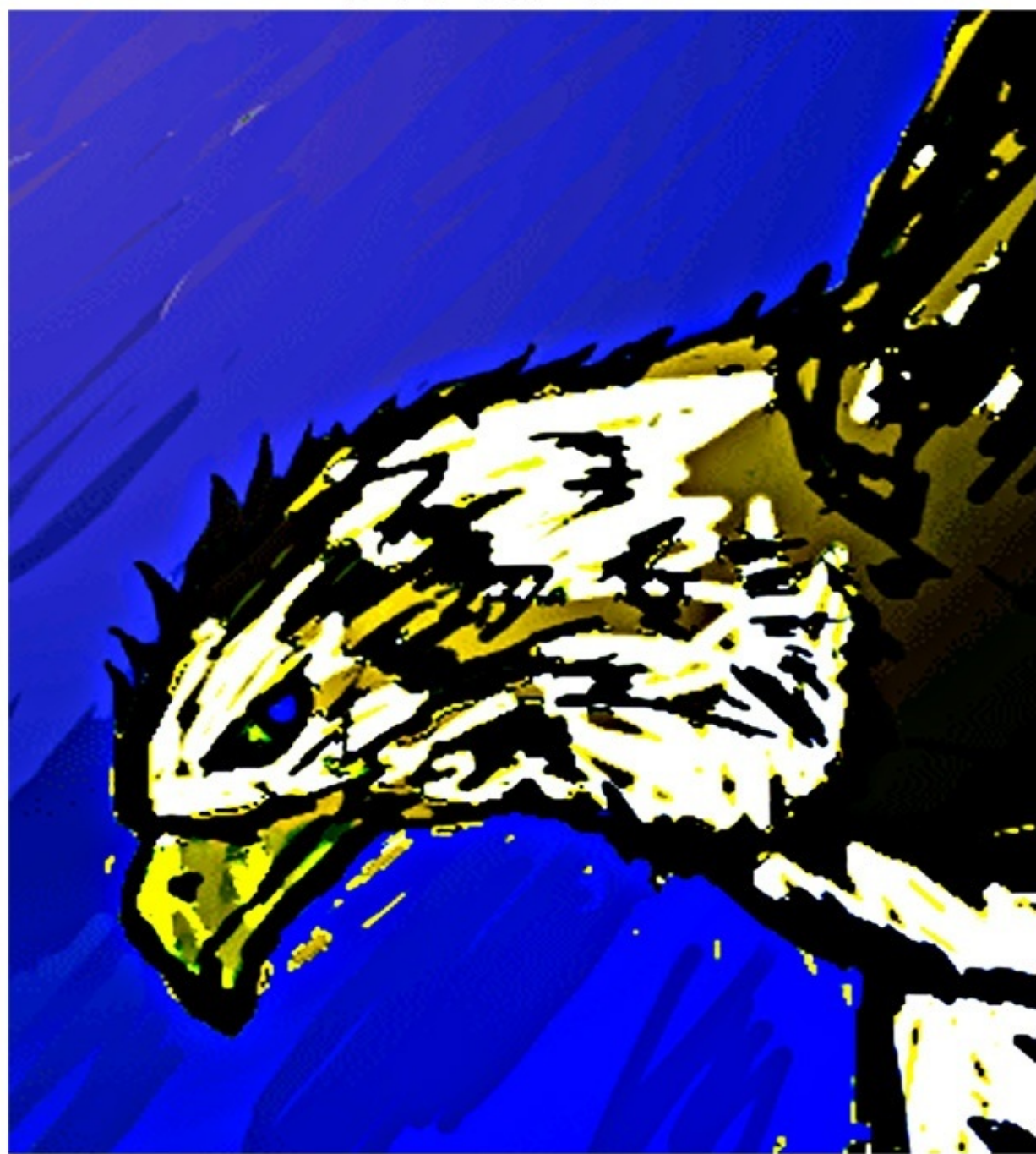


◆かっぱ民話シリーズ④◆

河童のお使い、

かっぱのおつかい



作：近藤せいけん

相模の国に相模川にすむ、太郎河童はいつも一ぴき、孤独で寂しい日々を送っていた。

「ああ～誰か、仲間がこないかなあ」

「一ぴきじゃ、寂しくて気がおかしくなりそう」

「話あいてが欲しい、あそび仲間がほしい～」

「一ぴきじゃ、生きていけない」

そこで、太郎河童は「大山の天狗様」をお願いすることを思いついた。

「大山の天狗様、どうか、どうか、河童仲間をよびよせてください」

太郎河童は熱心にいつまでも祈りつづけた。すると霊峰大山から一筋の黄金の光が輝き、太郎河童を包んだ。

太郎はまぶしくて目をあけていられなかった。大きな声が頭上に響いた。

「太郎河童、おぬし、わしを呼んだか！」

「もしや、大山の天狗様でございますか」

「そうじゃ、わしが大山の天狗じゃ」

「ははあ～。おそれいます」

「さ～て、わしに何ようか？」

「話してみよ」

太郎河童はこれまでのいきさつを話し、一ぴきがどんなに寂しいか、悲しいか、不安か話した。

天狗様は上空にとどまり、じっと、河童の話を聞いていた。

「それで、おぬしは河童仲間をよびたいとなあ、ん…ん」

「そうか、その願い、聞きとどけよう」

「それで、河童仲間は日本のどこにおるのじゃ？」

「はい、私ども河童は河童語と、独自の通信があります」

「よんでいただきたいのは、数十箇所ございます」

「そんなにいるのか？」

「もう少し、しぼれないか」

「はあ～そうですか。それでは数箇所にしぼります」

「それでは御言葉にあまえまして、まず遠野のかつば、五島列島の（ガータロー）、島根の日野川のかつば、筑前若松のかつば、をお願いいたします。」

「さようか。よし！あい解った。」

「おぬしの檄文はどうする？」

「ひょうたんに、わしのかつば語を入れ届けてください」

「ひょうたんにかつば語をいれるとなあ。わはは、わはは！ゆかい、ゆかい」

天狗様が高らかに笑いました。

「天狗様がおいきになるのですか？」

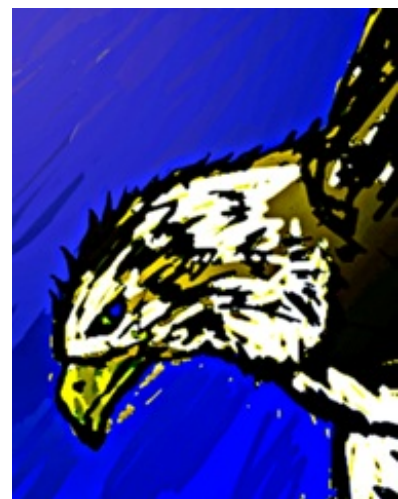
「わしはいかぬ」

「えっ、どなたがいかれますか？」

「太郎河童、後ろをみよ！」

「え、なんですか？」

中州に生えている木の上に一羽の大きなワシが音も無く止まっていた。



「わしの使いじゃ」

「は、は、は ワシ殿が運んでくれるのですか」

「ぜひ、お願いいたしますじゃ」

太郎河童のかっぱ語を入れた、ひょうたんが各地の河童に運ばれた。

太郎河童のゲキはこう吹き込まれていた。「我々、河童族は子々孫々に渡るまで生き残り、繁栄しなければならない。人間界と和し共に共栄共存をしなければならない。河童族の団結をはかり、交流をはかり、子々孫々に渡るまで繁栄をしなければならない」

「相模のかっぱ祭りを楽しもうぞ！」

「賛同されるかっぱ族は、春はさくらの咲く頃、相模の国、相模川にご参集くださりたい。相模の国 相模川の河童 太郎」

大山の天狗様のお使いワシは各地の河童族にひょうたんのゲキのかっぱ語とある物をおいていった。

ワシがササの葉をくわえ、吹きあげると、みるみる「和船」に変わり、河童族の足として使える船が何そうもできた。

河童族は大変喜んだ。

「この船があれば、遠い相模の国まで寝ていてもいける」

「ようし！春はさくらの咲く頃、一族で相模の国へいくぞ！」

「相模の太郎河童に会うのが楽しみだ」

「大山の天狗様のお使いワシ殿、たしかにうけたまわった」

「この返事をひょうたんに吹き込みますので、お持ち帰りいただきたい」

ワシ「承知した」

大山の天狗様のお使いワシは各地のかっぱ族の返事をもって、太郎河童にとどけた。

「ありがたい！お使いワシ殿、ありがたい、ありがたい」

ところで、太郎河童

「ワシにも、天狗様が召し上がった、相模のかっぱ漬けをだしてくれ」

「はい、おやすい御用、しばらくお待ちあれ」

最初は旬の野菜、白菜漬けを出した。

「今に時期は白菜の漬物が、一番おいしゅうございます。」

ワシ殿は白菜づけを、「ぱりぱり」と食べた。

「う～う、もっと他のものはないか？」

「それでは、なすづけでございます。」

ワシ殿は茄子づけを「とんとん」と食べた。

「う～う、もっと他のものはないか？」

「それでは、胡瓜づけでございます。」

ワシ殿は胡瓜づけを「きゅ、きゅ」と食べた。

「う～う、もっと他のものはないか？」

「それでは、かぶづけでございます。」

ワシ殿はかぶづけを「ぶか、ぶか」と食べた。

「う～う、もっと他のものはないか？」

「それでは瓜づけでございます。」

ワシ殿は瓜を「りう、りう」と食べた。

「う～う、もっと他のものはないか？」

ワシ殿はらっきょを「らく、らく」と食べた。

「う～う、もっと他のものはないか？」

「それでは、だいこんでございます。」

ワシ殿はだいこんを「こんだい、こんだい」と食べた。

すこし、間をおいて、ワシ殿が大きな声で。

「太郎河童、美味であった。美味、美味」

「ごちそうになった。さくらの花の咲く頃、おおぜいのかっぱが訪れるであろう。」

「太郎河童、おぬしの願いがかなった、よかったな。楽しめ」

「太郎河童、おぬしにも、どこでもいける和船（かっぱ船）をしんぜよう」

ワシはささの葉をでだと、「ふ～ふ～」と息をを吹きかけた。

すると大きな和船が、ぱあっとあらわれた。

「このかっぱ船はおぬしのがてな、大ぜきもらくらくのりきる海にもいかれるぞ」

「わあ～本当か、すごい！」

ワシ殿は「ギャア～」と一声なくと羽を広げた。

「いざ、さらばじゃ～」

ワシ殿は霊峰大山に向かって飛びたった。

(終わり)